

最先端科学が育む宗教的情操

21世紀、科学こそが、我々の心の中心に、最も深い宗教的情操を育んでいくのではないだろうか。

例えば、現代の最先端科学が解き明かしたところ、この宇宙の起源。

この宇宙が誕生したのは、138億年前。そこには、ただ、「量子真空」(Quantum Vacuum)と呼ばれるものが存在した。その量子真空が、突如、ゆらぎを生じ、急激な膨張を遂げた。それが「インフレーション宇宙」と呼ばれるもの。さらに、その後、大爆発が生じ、この宇宙が誕生した。それが「ビッグバン宇宙」と呼ばれるもの。

そして、誕生した宇宙は、当初「光」(光子・フォトン)で満たされた。それが徐々に冷え、最初に、最も軽い元素である水素が形成された。次いで、その水素が互いに重力で引き合っただけで、何億年もかけて生まれたのが、夜空に輝く無数の星々、恒星であり、その一つ、太陽の周りに生まれた惑星が

この地球に他ならない。

これが、現代科学が明らかにしつつある宇宙誕生のプロセスである。

しかし、この理論だけでも、我々は、深淵を覗くような不思議を禁じ得ないが、実は、現代の最先端宇宙論は、この「真空から生まれた宇宙」という驚愕の考えを超え、さらに、我々の想像を遙かに超えた理論を生み出つつある。

それが、「パラレル宇宙論」や「マルチバース論」と呼ばれるもの。

すなわち、我々の生きている宇宙は、量子真空から生まれた無数の宇宙の一つに過ぎず、他にも、数限りない宇宙が存在するという理論、いわば、「ユニバース」ならぬ「マルチバース」が存在するという考えを、最新の宇宙論は提唱するに至っている。

ただし、この最先端宇宙論が提唱する理論は、その真偽を、我々の生きる宇宙からは確かめることができない。

すなわち、現代科学は、いま、自らの宇宙の起源について、決して答えることのできない「永遠の問い」の前に立ち尽くしているのである。

しかし、この宇宙の起源についての科学理論を聴くとき、我々は、不思議なことに気がつく。

なぜなら、キリスト教の旧約聖書、創世記では、初めに「光あれ」という言葉から、この世界が始まったと述べており、仏教の般若心経に語られる言葉は、「色即是空、空即是色」であり、この現象世界「色」が、すべて「空」から生まれてきたと述べているからである。

もし、それが単なる偶然であるとしても、現代の最先端科学が語る、この宇宙の起源についての話を聴くとき、我々が、「深遠」と呼ぶべき不思議な感覚に包まれるならば、それは、紛れもなく、我々の心の中に「宗教的情操」が芽生えてくる瞬間であろう。

たさか・ひろし ● 81年、東京大学大学院修了。工学博士。87年、米国パテル記念研究所客員研究員。90年、日本総合研究所の設立に参画。取締役を務める。00年、多摩大学大学院教授に就任。同年シンクタンク・ソフィアバンクを設立。08年、世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilメンバーに就任。11年、東日本大震災に伴い内閣官房参与を務める。13年、全国から4700名の経営者やリーダーが集い「21世紀の変革リーダー」への成長をめざす場、「田坂塾」を開塾。